

【調査】

チュルゴの未発表資料(Ⅱの1)

Archives du château de Lantheuil の初期未発表資料

1750年の Sorbonne 開講講演の草稿 (1)

ノルマンディ上陸作戦のさいに、最大規模の上陸地点となった Arromanches ——いまここに上陸作戦記念のミュージゼがある——から Caen に向って東南に直線距離で約10キロのところに Lantheuil という土地がある。Caen からいえば、西北に約16キロ、征服王 Guillaume の王妃 Mathilde のタビストリで有名な Bayeux の町からは、ほぼ真東に約13キロの地点である。このあたりは見渡すかぎり広々とした、みるからに肥沃な典型的なノルマンディの台地で、その一面の麦畑のなかに窪地のためすこし沈んでみえる森があって、château de Lantheuil はそこにある。17世紀のなかばに建てられた、このシャトーは、三階建てでコの字型に前庭を囲み、窪地の斜面を後背の庭園に生かして、気品のあるしずかなたたずまいをみせている。Turgot の多数の文書、ことに初期の資料のほとんどが、いまこのシャトーの個人アルシヴにある。

しかし、Turgot は生前にこの美しいシャトーを訪ねたことはなかった。またかれの文書は最初からここにあったのではない。Turgot 家の所領は代々このあたりにあったし、かれ自身もリモージュの知事時代に友人に頼まれて Cotentin 半島の付け根の Aulne のあたりに領地を購入していた——baron de Aulne という称号はここに由来する——が、Turgot の生前には、このシャトーは親戚にあたる Turgot de Saint-Clair 家に属していた。また Turgot の文書は、かれが生涯独身であったため、死後は Malesherbes の手に委ねられ、Malesherbes の死後は Turgot の次兄で Guyane の総督として、また植物学者として知られた Etienne-François Turgot によって保管されるようになり、その後 Etienne-François の子孫で現在シャトーの居住者である marquis Naurois-Turgot 家にひきつがれている。第2次大戦中、このあたりはノルマンディ上陸作戦にともなって激戦地となり、このシャトーの近くの château de Creully の塔には連合軍側の前線放送局が設けられたほどであったが、この間 château de Lantheuil の文書類はパリの Louvre に移管され、戦後ふたたびこの地に戻された。現在、Turgot の文書類は、この Naurois-Turgot 家の

28コの文書箱のうち第20~28箱のなかに保管されている。

こんにちフランスでは、一般に旧貴族の文書類は Archives nationales その他公的な archives への寄贈あるいは寄託、あるいは原本を所有者に残しマイクロ・フィルムでのコピーを寄託するよう政府によって奨励されているが、この Archives du château de Lantheuil の場合はそうではない。コピーはどの公的な archives にもないので、研究者は直接 marquis Naurois-Turgot 家の許可をえて調査するほかないのであって、この点、困難はすくなくない。私は手紙や電話による数度の交渉のうち数日間づつ前後3度にわたって調査し、そのつど marquis Naurois-Turgot 家の、とくに Madame la marquise の御好意で多くの便宜を提供されたが、いまなお多少の作業を残している。

Archives du château de Lantheuil の Turgot 文書はすでに Dupont de Nemours が9巻本チュルゴ著作集(Oeuvres de Mr. Turgot, ministre d'Etat. Paris, 1808-10, 9 vol.)を編集したときに使用されたし、いまからおよそ60年前、Gustave Schelle は5巻本チュルゴ著作・関係資料集(Oeuvres du Turgot et documents le concernant. Paris, 1913~23, 5 vol.)を編集したさい、この archives の文書を丹念に整理することによって、非常に恣意的な改ざんの多かった Dupont de Nemours 版の誤りを文字どおり画期的に正した。こんにちこの archives の文書の束ごとに、Dupont de Nemours や Schelle の筆蹟によって分類上のノートやメモが書きつけられていて、Turgot 文書の編集の困難のあとがみとめられる。ただし、Schelle がチュルゴ著作・関係資料集を編集するため、直接この地に足を運んだかどうかは疑問の点がある。なぜなら、あの Schelle の厳密な編集ぶりに反して、多少の資料の見おとしがあるからである。たしかに Schelle の資料の収集ぶりとテキストの校訂ぶりは徹底的で厳密であった。Schelle 以後になにもつけ加える必要はない、とごく普通に思えるほどであった。まして東洋の非力な一研究者が赴く必要はない。しかし、チュルゴの未発表資料(I)蔵書目録でのべたよ

うに、Schelle が Turgot の蔵書の売立て目録ではなく、手稿の蔵書目録の存在になぜか気づかなかったこと、その他同様のいくつかの点に気づいてみると、あえてもう一度吟味してみる必要は感じられた<sup>1)</sup>。

しかし、Archives du château de Lantheil を調査してみると、いまさらのように Schelle の業績の大きさを感ずる。Schelle 版のチュルゴ著作・関係資料集の学術的権威はいまなお高く、Schelle 版に加えられるべき基本的に重大な改訂はない、といえる。ただし、さきへのべたように、なぜか Schelle がみおとした資料断片や、すでにその存在に気づいていながら故意にその発表を伏せておいたものが多少ないわけではない。

以下に、marquis Naurois-Turgot 家の許可をえて、いわば Schelle 版への追加として、これら未発表資料を順次発表していくことにする。

Turgot は、ソルボンヌの付属神学院(*la maison de Sorbonne*)に在籍中、1749年に学寮長(*le prieur*)に選ばれ、恒例により1750年度の開講と閉講のさいにラテン語でそれぞれ一場の講演をおこなうことになった。23才であった。かれは、開講講演としては『キリスト教の確立が人類に与えた諸利益についての講演』(*Discours sur les avantages que l'établissement du Christianisme a procurés au genre humain*)、閉講講演としては『人間精神の継続的進歩の哲学的展望』(*Tableau philosophique des progrès successifs de l'esprit humain*)という題目を選び、友人たちと相談しながら——このことはあとでふれる——さっそく準備にかかった。これら2つのテーマは当時の Turgot にとっては親しいものであった。というのは、かれは1748年ごろ、『著述予定一覧』(*Liste d'ouvrages à faire*)をしたため、そのなかですでに『自然学による神の存在』(*L'existence de Dieu par la physique, poème*)、『自然宗教』(*La religion naturelle, poème*)、『教理の歴史と議論』(*Histoire et discussion des Dogmes*)『世界史』(*Histoire universelle*)、『人間精神の歴史についての考察』(*Considérations sur l'histoire de l'esprit humain*)等々を研究対象としていたし<sup>2)</sup>、同じ1748年に、Soissons のアカデミーの懸賞論文にこたえて、『科学・技芸の進歩と衰退の諸原因についての研究あるいは人間精神の進歩の歴史についての考察』(*Recherches sur les causes des progrès et de la décadence des*

*sciences et arts ou Réflexions sur l'histoire des progrès de l'esprit humain*)という断片を書いていたからである。ソルボンヌ神学部といえは、当時は Buffon の *Histoire naturelle* にさえ弾圧を加えるほど、自由な学問研究に対する偏見の戦闘的な中心であったが、Morellet の証言によっても<sup>3)</sup>、また Turgot 自身の書簡や残された書きものとおしても、付属神学院の内部の雰囲気は相当に自由なものであった。1748年の Soissons のアカデミーに提出すべく書き残した諸断片のなかには神の問題は全然ふれられていない。これらの諸断片の基本は言語学研究にあり、それをとおしての人間精神の進歩の分析であった。ここで Turgot が言わんとしたことは、同年に出版された Montesquieu の『法の精神について』(*De l'esprit des loix*)の風土決定論に対して「自然的原因」より「道徳的原因」を重んずべきであるということであったが、全体の構成でいえば、第1に学問・技芸の進歩の条件を「民衆の言語の状態」と「政治機構」と「天才の偶然」とし、進歩はこれらの相互作用から生じること、第2に、人間精神の「尺度」としての言語、とくに民衆の言語は他の言語との融合(*mélange*)をとおして完成すること、第3に、「自然の利用」としての技術は人間の欲望に支えられて商業対象となり、商業の対象となることによって、技術は無限に進歩するというものであった。法服貴族の立場から、絶対王政とこれを支えるカトリックとを相対化し、ベシミスティックな歴史観を示す Montesquieu に対して、Turgot はここですでに絶対王政の啓蒙化・合理化をめざす立場から、オブティミスティックな歴史観の基本を示している。この基本は、さきにあげたソルボンヌでの閉講講演で、有名な「進歩の歴史観」として完成された形をとるようになる。この基本線がさらに1751年ごろの『世界史にかんする2つの講演プラン』(*Plan de deux Discours sur l'Histoire universelle*)「政治地理学についての著述プラン」(*Plan d'un ouvrage sur la Géographie politique*)に発展して、やがて「政治経済学」の構想に結ぶのだが、ここではこの問題には立入らない<sup>4)</sup>。

1748年の Soissons のアカデミーのための諸断片か

3) A. Morellet. *Mémoires de l'abbé Morellet, ... sur le dix-huitième siècle et sur la Révolution*. Tom. 1., Paris, 1821, p. 7 et suiv.; D. Dakin. *Turgot and the ancien régime in France*. London, [1939,] p. 10.

4) 津田内匠「チュルゴの歴史思想と政治経済学の形成」『一橋論双』第55巻第2号(1966年2月)参照。

1) 津田内匠「チュルゴの未発表資料(Ⅰ) 蔵書目録」『経済研究』第22巻第3号(1971年7月)。

2) *Œuvres de Turgot*(Ed. Schelle). I., p. 115.

らソルボンヌでの閉講講演を経て『世界史』や『政治地理学』にいたる展開は理解しやすい。しかし、ソルボンヌでの開講講演はどのように理解できるだろうか？

Turgot の開講講演は、序論に相当する部分と第I部と第II部とからなる。Turgot はまず、序論の部分で、キリスト教は来世の幸福を説くだけで人間の現世的幸福と社会の現実的利益に反するといつて神を非難する不信の徒に対する反論の必要を訴え、第I部では人間それ自身に対するキリスト教の影響を論じ、第II部では政治社会の構成と福祉に対するキリスト教の貢献を論じている。第I部・第II部をとおして、Turgot が強調するのはキリスト教の utilité であり、またそれに限られている。全体を要約すれば、キリスト教は人間に徳(vertu)を与え、習俗(mœurs)を良くし、立法を改善した、ということである。Turgot はキリスト教以前と以後とを区別し、またキリスト教文化圏とそれ以外とを区別する。つまり古代ローマ市民には真の vertu はない。それはたんに奴隷に対する一部市民のおごりにすぎない。古代諸民族は野蛮の上に支えられていたが、キリスト教の普遍的愛、つまり人類的規模での vertu にふれるにつれて、かれらの活動は、キリスト教の精神のもとに人類の文化として歴史的に蓄積されてきた。同様のことは、地理的に東方諸民族についてもいえる。キリスト教の utilité というのは、たとえば、古代諸民族あるいは東方諸民族の主要な活動であった戦争という接触のなかから、キリスト教が言語を保存し、諸技術を伝え、mœurs をよくすることによって、法が強者の弱者に対する抑圧の手段ではなくなり、「富の尺度」となる人間の欲求を調和的に発展させることによって、統治する部分と統治に従う部分との均衡に導いたことである。その良い例は、ルイ14世をはじめクリスチャン君主のもとでのフランスや、とりわけアメリカ新大陸における政治社会の経済発展である<sup>5)</sup>、と Turgot はのべている。

この開講講演は、一見 Bossuet の神学的歴史観の影響を脱していないようにみえる。Bossuet が、Spinoza のような日ましに高まる不信の哲学や Malebranche のように護教的ではあっても神の權威を軽くするデカルト哲学に抗して、必死になって神の摂理を説き、それにもとづく世界史を描き、絶対王政を支える教会側の中心人物として王権を強化しようとするのに類似している。つまり1つの宗教、1つの王権、1つの教会というわけである。しかし、Turgot は Bossuet とちがって神の摂理

ですべてを説こうとはしなかった。かれはキリスト教の教義そのものについて語らなかった。かれはただ、歴史的・社会的存在としてのキリスト教の果たした utilité を「ただ事実のみ即して」語ったのである<sup>6)</sup>。神学はすでに世俗化されつつあったし、すくなくとも、Turgot の接する神学はすでに啓蒙化され、合理化されたものであった。Locke の経験論を学んで、人間それ自身に備わる完成可能性を信ずる Turgot は、古代人と近代人の間に固有の能力の差を認めない。かれは、人間それ自身に備わる能力を十分に発揮させる役割をキリスト教の確立のなかにみにすぎなかった。かれが、問題をキリスト教の utilité に限定するのはそのためであり、またそのためにこそやがてキリスト教を離れて「進歩」の一般を展望することができたのである。Bossuet との関係については次稿で詳しくのべるが、この開講講演は、Bossuet の神学的歴史観の影響下にあつたのではなく、むしろ Bossuet の歴史観に抗して Turgot 自身の「進歩の歴史観」を展開するための試論であり、またその意味で、開講講演全体が閉講講演のための序論であつたといつてよい。

しかし、この開講講演に対しては、閉講講演に対するのとちがって、かならずしも評価が一貫していたわけではない。「啓蒙の世紀」である18世紀には、この一見護教論的な論調に対して、慎重な警戒の姿勢が示された。まず、最初の評伝作者である Dupont de Nemours は、この開講講演から「キリスト教の確立が人類に与えた諸利益について…」というキリスト教の始源的な影響力を取り除き、ただ「著者はそこにおいて世論の習俗におよぼす影響と習俗の統治におよぼすそれとを詳述している」というふうだけに解説し<sup>7)</sup>、また9巻本著作集の編集にあたっては、Turgot が不信の徒に反論する必要を訴えた序論の部分をもほとんど全面的に削除し、「普遍宗教」を信奉する立場からであろうか、Turgot の「啓示」という語をことごとく書き変えた<sup>8)</sup>。これに対して、第2の評伝作者である Condorcet は、Turgot の指摘する「キリスト教の主要な善行」をより忠実に要約したが、同時に、Turgot が「教会権力のおそるべき害悪に目をつむったわけではない」ことを要約より多くのページを使って弁明せざるをえなかった。「チュルゴは宗教の必

6) *Ibid.*, I., p. 195.

7) [Dupont de Nemours] *Mémoires sur la vie et les ouvrages de M. Turgot, ministre d'Etat*. 1<sup>re</sup> part. Philadelphie, 1782, p. 9; *Œuvres de Turgot* (Ed. Dupont de Nemours). Tom. I., Paris, 1814 (2<sup>e</sup> éd.), p. 12.

8) *Œuvres de Turgot* (Ed. Dupont de Nemours). II., Paris, 1808, pp. 19-51.

5) *Œuvres de Turgot* (Ed. Schelle). I., pp. 194-214.

然的帰結のなかに害悪だけをみるには啓蒙されていすぎた」のである<sup>9)</sup>。19世紀に入ると、「啓蒙の世紀」の警戒心はなくなったが、評価はまったくあいまいなものとなった。諸研究は、この開講講演を Bossuet の延長線上での啓蒙化・合理化と評価し、キリスト教の utilité の強調を Montesquieu の論点の継承とみたのである<sup>10)</sup>。その後、Schelle によってテキストが確定されたものの、Dakin はこの開講講演を Soissons のアカデミーあてに用意された諸断片と有名な「進歩の歴史観」の典型的表現である閉講講演の間に埋没させて、積極的にふれるところはほとんどなかった<sup>11)</sup>。Schelle 自身もそうであった。ただ最近になって、Turgot の歴史・経済学著作の英訳を発表した Meek は、その解説で、この開講講演が「普通思われている以上に重要な意味をもっている」と指摘し、適切な問題点の要約のあと、「重要なことは、もちろん、『これらの緩慢な、しかも継続的な前進』を生み出すのはキリスト教ではなく、またあきらかに(理神論の)神でもないということである」とのべている<sup>12)</sup>。開講講演に対する評価はやっとはじめられた、といえよう。しかし、開講講演での Christianisme の強調が、最終的に Turgot 自身の「進歩の歴史観」を制約するものではないことはあきらかだとしかても、Christianisme の強調は Turgot にとってただそれだけのものではあったらうか？ Turgot は1751年のはじめに、突如ソルボンヌを離れること、つまり聖職者のコースを棄てることを宣言する。わずか半年ほど前の Christianisme の強調にはどのような意味があったらうか？

Turgot は1750年7月3日に開講講演を、同年12月11日に閉講講演をおこなったあと、自分でラテン語とフランス語による両講演を数部コピーして友人たちに配った、といわれている。Schelle が両講演のテキストを確定するために用いたコピーはその後見出せないが、Victor Cousin がコピー1部を所蔵していて、これがこんにちソルボンヌの Bibliothèque de Victor Cousin の

なかにみられる。このコピーは Turgot によって友人 Loménie de Brienne に贈られたもので、蔵書票(Ex Libris de Brienne)がついている。このコピーには Turgot の手で多くの訂正が加えられている。これは Schelle によって参照されたものではないが、Schelle によって確定されたテキストに非常に正確に合致している。

ところで、Archives du château de Lantheuil には、この開講講演のためのいずれも未完の四種類の未発表草稿がある。これらの草稿の存在については、Dupont de Nemours は承知していた。かれは、これら草稿の束に「これらはソルボンヌの講演で使用された資料である」とノートしただけで発表しなかったし、かれの Turgot 評伝でも9巻本 Turgot 著作集でも草稿の存在については、いっさい言及しなかった。以下にみられるテキストであきらかなように、Dupont には、これらの草稿は実際におこなわれた講演よりずっと護教的色彩が濃いとしか思えなかったのであろう。Schelle はこれら草稿の存在を知っていたところではない。かれも草稿の束に「講演のための資料を発表してはならない」とノートし、理由として『講演のための断想』と題する手稿はパトリオチズムとキリスト教的徳との興味深い比較をふんでいる。しかし発表すべきではない。発表すれば、チュルゴのパトリオチズム観についてまちがった解釈を生むだろう」から、と書きつけている。Schelle は、だから、開講講演のテキストに注をつけて、草稿が Archives du château de Lantheuil にあること、そのうち2つの草稿には友人 abbé Bon の訂正があることをのべただけで、草稿の内容にはふれなかった<sup>13)</sup>。

これら4つの草稿、つまり Schelle のいう plusieurs canevas du discours とはつぎのものである。

Discours sur les avantages que l'établissement du Christianisme a procurés au genre humain.

Discours sur les avantages que l'établissement du Christianisme a procurés au genre humain.

Pensées pour le Discours sur les avantages que le Christianisme a procurés au monde.

Plan général du Discours sur les avantages que la Religion chrétienne a procurés au genre humain.

またほかに、これらの草稿といっしょに、Vues pour le Discours と題する未完の手稿がある。これについては、Dupont de Nemours が「abbé Bon のもの、チュルゴがノートをつけている」と注記しているが、こ

9) [Condorcet] *Vie de Turgot*. Londres, 1786, pp. 7-10.

10) A. Batbie. *Turgot philosophe, économiste et administrateur*. Paris, 1861, p. 149.; J. Tissot. *Turgot sa vie, son administration, ses œuvres*, Paris, 1862, p. 381.; A. Neymarck. *Turgot et ses doctrines*. Tom. 1. Paris, 1885, pp. 13-14.

11) D. Dakin. *op. cit.*, p. 10 et pp. 282-286.

12) R. L. Meek. *Turgot on progress, sociology and economics*. Cambridge, 1973, Introduction. pp. 6-7.

13) *Œuvres de Turgot* (Ed. Schelle). I., p. 194(b).

の未完の手稿全体が Turgot の自筆で書かれており、ノートはない。この手稿の内容は Turgot のものであることにまちがいはないが、ただ閉講講演のための問題点の整理とも思えるし、1748年の Soissons のアカデミーのための問題点の整理とも思える。いずれにしても、開講講演のための4つの草稿とは性質を異にするものであるが、テキストは参考資料として以下に掲げておくことにする。

開講講演のための4つの草稿はつぎの2つのグループに分けることができよう。全く同じ題名の2つの Discours と別のグループの Pensées と Plan とである。ここでは紙数の関係上、第1グループの2つの Discours と参考資料としての Vues pour le Discours だけを発表し、第2グループのテキストは次稿にゆずることにする。前者は後者に比べて、内容的にも短かく、実際におこなわれた開講講演の序論の部分に相当するもので、したがって論点の展開はほとんどない。すなわち、一方の Discours では、時を追って高まる不信の哲学を荒れ狂う海やすべてを押し流す奔流にたとえて、キリスト教擁護のための危機感を美文調で訴えようとしている。別の Discours では、悪としての passions と善としての raison とが強い調子で対比され、それをキリスト教の精神がいかに有効に仲裁したか、いかにそれらを統合して導いたかをのべること、つまり「宗教と自然および政治のすばらしい合致」を示すこと、またこれによって不信仰と対決することがのべられている。両者に共通していることは、すでに開講講演全体が第I部・第II部に分かれ、キリスト教が人間そのものにおよぼした影響と政治社会の構成におよぼした影響とが現実的な利益の観点で語られるべく構想されていたことである。そして、この構想をもつにいたった不信仰の哲学に対する危機の意識は、実際におこなわれた講演の場合よりずっと卒直に表明されている。

第1グループの草稿の執筆が第2グループのそれより早いことはあきらかだが、第1グループの2つの草稿の執筆の順序はあきらかではない。しかし、序論の部分は、草稿が改められるにつれて簡潔なものとなったであろうという推定が許されるとすれば、以下に排列するような順序であったろう、と思われる。おそらく Turgot は、はじめての講演を前にして、青年らしい緊張と自信をもって準備したであろう。まずかれは美文調で訴えるような草稿を友人 abbé Bon にみせた。批評は意外に冷たく、「つまらなくて批評する気にもなれない」というものであった。たしかにおおげさで冗長であった。Turgot は、いっそう簡潔な序論を準備した。こんどは、批評は

まったく表現上の問題に限られたが、まだ第1の草稿の調子が残っているように思えた。このあと、ほとんど序論のない第3の草稿が書かれ、第4の草稿と実際の講演では、序論の部分は非常に簡潔なものとなった。そこでは問題は冷静に提示されている。この序論の部分の推移をみると、Turgot の実際にはかくされた生々しい危機の意識が感じられるのである。

この危機意識は不思議ではない。Turgot はすでに1746年の Diderot の『哲学断想』(Pensées philosophiques)に対して、かれなりの理神論・無神論・懐疑論批判をひそかに書き残していた<sup>14)</sup>。Turgot のこの断片は Schelle によって発表されたが、なぜか未発表の部分が多く残されている。いずれこの未発表部分を発表する予定であるが、既に発表されている部分に限ってみても、Turgot の Diderot 批判の当否は別として、キリスト教擁護の危機意識は鮮明である。しかし、それは単なる護教論ではない。Turgot は、この講演草稿では、passions と raison の対立を Christianisme が調停し指導すると理解している。これは、やがて閉講講演で歴史の動因として表現される「理性・情念・自由」と対応するものである<sup>15)</sup>。つまり開講講演では、Turgot は、人類が諸々の融合(mélange)をとおして「緩慢な、しかも継続的な前進」を可能にする「自由」を獲得するために「キリスト教の確立」が果たした utilité を指摘し強調したのであり、このことを1748年の Soissons のアカデミーのための諸断片との関連で見れば、Turgot がそこで Montesquieu の風土決定論に対して「道徳的原因」の優位を主張した、その具体的展開として、つまり歴史に付与されるべき主体性の展開として、「キリスト教の確立」の果たした役割を指摘し強調したと理解することができよう。しかも、すでにのべたように、Turgot の1748年の諸断片における Montesquieu 批判は風土論の当否の問題ではなく、むしろ Montesquieu の法服貴族の立場からする絶対王政の相対化の構想に対する批判であった。Turgot の Christianisme の強調は、このような絶対王政の啓蒙化・合理化の構想の一貫として理解される必要がある。このことは、次稿で示す第2グループの草稿に具体的にみられることである。

【津田内匠：一橋大学経済研究所】

14) *Oeuvres de Turgot* (Ed. Schelle). I., pp. 87-97. Réflexions sur les Pensées philosophiques de Diderot: I. Réflexions générales. II. Sur quelques endroits d'un livre intitulé: Pensées philosophiques.

15) *Oeuvres de Turgot* (Ed. Schelle). I., p. 215.

**Discours sur les avantages que l'établissement  
du Christianisme a procurés au genre humain**

La Religion chrétienne fondée par un Dieu mourant, portée chez toutes les nations par la voix de douze pêcheurs, accrue dans le sein de la persécution, stable au milieu des plus terribles orages, devenue plus féconde par le sang des Martyrs, florissante parmi les bûchers et les chevalets, triomphante enfin des préjugés du vulgaire, des sophismes des philosophes, de la rage des persécuteurs et des passions des hommes, après s'être répandue comme un torrent qui surmonte et qui couvre les digues même qu'on lui oppose, dominante aujourd'hui sur les peuples entiers, embrassée, protégée par les Rois et placée en quelque sorte sur le trône avec eux, voit succéder de nouveaux ennemis à ceux qu'elle a terrassés. L'incrédulité s'efforce de déchirer son sein et d'armer contre elle les bras de ses enfants; depuis l'établissement paisible<sup>\*</sup> du Christianisme, elle ne cesse<sup>\*\*</sup> d'insinuer son poison funeste et de faire couler de siècle en siècle ses frivoles objections; aussi constamment que la mer vient chaque jour frapper le même rivage, ou depuis le commencement du monde, elle a vu se briser l'orgueil de ses vagues; les vains raisonnements des incrédules mille fois confondus et mille fois soulevés de nouveau par leurs passions reviennent assaillir de tous côtés l'édifice inébranlable de la Religion. Aujourd'hui même, il semble que l'enfer frémit avec plus de rage. Le nombre des impies s'augmente de jour en jour: déjà<sup>\*</sup> fiers de leur multitude, ils insultent à ceux qui ont le courage de ne pas rougir de l'Évangile, courage nécessaire à la bonté de notre siècle. L'irréligion comme une mer irritée semble ne plus connaître de bornes et menace d'engloutir l'héritage de Dieu même<sup>\*</sup>. Je sais, O mon Dieu,<sup>\*\*</sup> que tous ses efforts seront vains, je sais que tu as tracé une ligne sur le sable et que tu as dit à la mer: tu viendras jusques-là et tu n'iras pas plus loin. Affermi sur les fondements de la parole immuable, l'édifice de ton Église bravera les temps et les portes de la mort ne prévaudront point contre lui. Je le sais: ainsi, je suis loin de prétendre contribuer par des raisonnements humains à sa stabilité, et d'imiter la crainte, sacrilège de celui qui osa porter ses mains à l'arche sainte pour la soutenir. Mais, tous les jours le torrent de l'impiété détache de l'édifice quelques pierres mal cimentées; le vent de la séduction enlève tous les jours des pailles légères de ce champ où ton sang versé est le germe d'une moisson toujours abondante et d'une éternelle fécondité. Des passions ardentes, une philosophie présomptueuse égarent mille à mes faibles et les engagent dans la foule insensée de tes ennemis. Les uns sont ébranlés, prêts à être séduits; la contagion les environne de toutes parts; les autres déjà séduits, déjà corrompus, déjà pestiférés portent partout avec eux le venin dont ils sont remplis pour infecter les autres. C'est pour eux et non pour la

\* Mot équivoque.

\*\* Expression fade.

\* *Déjà* est inutile.

\* A quoi bon ce *même*.

\*\* cet apostrophe est bonne, per la predica.

Questo buono per la predica.

Tout ce qui reste, on allonge; fade quoiqu'entremêlé de quelque expression forte, je me lasse de critiquer.

Tout ceci a un air didactique, je renvoie à l'exorde de l'abbé de Cicé pour voir comment on peut mieux exposer les difficultés.

Religion que j'écris. Daignes, mon Dieu, s'ils n'ont pas encore lassé tes bontés, si ton sang répandu pour eux et qu'ils ont cherché à rendre inutile te parle encore en leur faveur; daignes favoriser mes efforts; daignes changer ma faiblesse en force; daignes toucher leurs cœurs, quand j'entreprends d'éclairer leurs esprits, de détruire les sophismes qui entretiennent leur effrayante sécurité, de les confondre par les armes de cette même raison qu'ils se vantent de prendre pour guide, lorsqu'ils ne suivent qu'un vain fantôme, qu'une apparence produite par l'ivresse de leurs passions, par les fumées de la chair et du sang. En vain, ferais-je briller à leurs yeux la lumière de la vérité, si ta main n'arrachait le voile qui les couvre? Si les adversaires du Christianisme avaient scrupuleusement, s'ils avaient pesé avec attention, avec exactitude, et surtout avec sincérité les différents motifs sur lesquels est appuyée notre foi; si, cherchant à s'instruire et non pas à douter, ils avaient feuilleté les monuments de l'antiquité, et suivi en détail l'histoire de la prédication de l'Évangile, discuté selon les lois de la certitude des faits toutes les circonstances qui ont accompagné les miracles de Jésus-Christ, leur étendue, leur publicité, le nombre, les lumières, la vertu, le désintéressement des témoins qui ont donné leur vie pour en attester la vérité, je leur reprocherais moins leur incrédulité; j'en serais moins indigné que je n'en serais surpris; ou plutôt, si cet examen avait été fait dans la droiture de leur cœur, ils ne donneraient lieu ni à la surprise ni à l'indignation; ils seraient chrétiens. Aussi, n'est-ce pas la voie qu'ils ont suivie? une pareille étude blesserait trop leur indolence et les dispositions de leur cœur. Dans ce grand nombre de volumes qu'a produits dans ces derniers temps l'impiété, je n'en connais point où l'auteur ait pris pour base de ses attaques l'histoire approfondie de Jésus-Christ et de ses apôtres. Ils n'ont osé alléguer jusqu'ici contre l'évidence des faits que des comparaisons plus fausses encore qu'odieuses, des suppositions vagues; mais, c'est surtout contre nos mystères, et contre notre morale qu'ils ont entassé reproches sur reproches, objections sur objections; l'obscurité de nos dogmes, l'austérité de l'Évangile trop opposée à leurs passions les rebutent, et pour ne pas voir la lumière éclatante qu'y répand le témoignage des miracles de Jésus-Christ, ils ont mis entr'eux et elle comme un nuage de préjugés. Parmi toutes ces difficultés souvent contraires les unes aux autres, parmi ces préjugés qu'ils accumulent avec tant d'acharnement contre le Christianisme, il en est un qu'ils semblent avoir pris à tâche d'insinuer particulièrement, et contre lequel j'essayerai de justifier la Religion dans ce Discours d'autant plus volontier qu'il est plus dangereux, et que plusieurs personnes pieuses entraînées par leur piété même y ont peut-être donné lieu par les principes qu'ils ont admis sans être assez en garde contre le venin qu'ils renfermaient sous prétexte que la Religion chrétienne ne présente cette vie que comme un passage, qu'elle détourne l'homme de la recherche des biens temporels dont la petitesse disparaît à la vue de l'éternité, qu'elle

ordonne au chrétien de dompter la révolte de ses sens et de ses passions; ses ennemis l'accusent d'anéantir la culture de l'esprit, les talents, les arts, le travail, l'industrie, le commerce, en proscrivant la curiosité, l'ambition, l'amour de la gloire, le désir des richesses; d'ébranler l'empire même de la vertu, en arrachant des cœurs toutes les semences des affections naturelles qui en sont la base la plus solide pour y substituer des espérances incertaines; enfin d'opposer au bonheur des sociétés un nombre infini de pratiques gênantes, de préjugés, de vertus chimériques, qui ne tendent qu'à concentrer l'homme en lui-même et à le rendre inutile aux autres. Ils calomnient la Religion tantôt en lui imputant des principes qu'elle désavoue, tantôt en tirant de fausses conséquences de ceux qu'elle établit, ils lui font un crime de ce qu'elle enseigne et de ce qu'elle n'enseigne pas. Que sais-je! Ils lui reprochent de n'être pas aussi corrompue qu'eux; ils ne rougissent pas de le dire; ils voudraient qu'elle permit d'être injuste. L'exacte équité, selon eux, en arrêtant les usurpations des princes, en leur défendant d'immoler à des prétentions iniques le repos, la fortune et le sang de leurs sujets, amollirait le courage, endormirait les peuples dans une oisiveté dangereuse; les ressorts de l'état rouillés dans l'inaction seraient sans force et le livreraient sans défense à ses ennemis. Plainte horrible! Et non moins contraire à la nature qu'à la Religion, comme si on pouvait craindre qu'il n'y eut pas assez d'injustices sur la terre, ou comme si les peuples avaient besoin d'être aguerris, si tous les hommes étaient justes. Il est vrai sans doute que la Religion chrétienne apprend aux hommes à ne soupirer qu'après le bonheur éternel, à dompter leurs passions, à régler les penchants de la nature; mais, à Dieu ne plaise qu'elle veuille en détruire les sentiments, jeter les hommes dans la langueur et dans l'engourdissement et renverser l'édifice du bonheur public. Elle veut qu'on désire la félicité d'une vie à venir, mais elle montre, en même temps, le chemin qu'il faut suivre pour y arriver, et ce chemin, c'est la pratique de toutes les vertus sociales, l'obéissance aux supérieurs, la bonté envers les inférieurs, l'équité envers tous les hommes, le sacrifice de l'intérêt particulier\* de grand nombre. Ses lois sont la justice et la charité. C'est au crime, c'est à l'intérêt particulier, à la licence, au débordement des passions, au renversement des lois qu'il faut imputer la chute des empires, et quelle force ne donne pas aux lois l'attente d'une éternité dont le sort dépend de leur observation. Bien loin donc d'arracher les hommes à la pratique des devoirs de l'humanité, elle est le motif le plus puissant dont on puisse se servir pour les engager à les remplir. C'est à l'expérience que j'en appelle; se refuseront-ils encore à sa décision? Voyons quels effets a produits sur la terre l'établissement de l'Évangile, qu'elles sont les suites de cette grande révolution qui a élevé le Christianisme sur les ruines de l'impiété et de la superstition qui partageaient le monde. Ce sera, Messieurs, l'objet de ce Discours. Nous comparerons l'univers chrétien et l'univers idolâtre. Je

\* à celui

m'efforcerai de vous montrer quels avantages la Religion a procurés au genre humain. Dans la première partie, je considérerai les hommes en eux-mêmes, c'est-à-dire, leur esprit, leur cœur, les rapports que la nature a mis nécessairement entre eux. Je les envisagerai, dans la seconde, du côté des liens arbitraires qu'y a mis l'établissement des sociétés politiques, des lois civiles, des différentes formes de gouvernement. En deux mots, j'espère vous exposer fidèlement ce que le genre humain a gagné à la prédication de l'Évangile par rapport à la nature, première partie, et par rapport à la police civile, ce sera la seconde.

#### Discours sur les avantages que l'établissement du Christianisme a procurés au genre humain

Depuis que les incrédules renaissent sous mille formes différentes ont combattu l'<sup>1</sup>Évangile de Jésus-Christ, ils se sont principalement appliqués à le dépeindre comme une doctrine pernicieuse aux sociétés et plus<sup>2</sup> capable de ravir aux hommes les biens<sup>3</sup> précieux de la vie présente que de les conduire au bonheur éternel d'une vie à venir: Tel est le raffinement de l'impiété<sup>4</sup>. Ils voulaient rendre à jamais irréconciliable cette opposition qui parut d'abord entre l'autorité des grands de ce monde et la morale sévère de Jésus-Christ. Ils auraient voulu persuader aux Césars qu'ils ne pouvaient devenir chrétiens sans renonce à la qualité de Césars et sans abjurer le titre de pères de la patrie. Contradiction apparente des grandeurs humaines et des vérités de la Religion! Ce qui ne fut jamais que l'effet des passions, on voudrait le justifier au tribunal de la raison; et substituer les lumières d'une politique éclairée aux ténèbres épaisses qui ferment l'âme des grands aux dogmes de l'Évangile. Le paganisme terrassé et frémissant imputa plus d'une fois les malheurs de l'empire aux succès du Christianisme. Mais, la victoire de cette calomnie valut de nouveaux lauriers à la Religion et à ses défenseurs. Les grands exemples des Constatins, des Charles, des Louis auraient dû apprendre au monde, qu'on peut attirer l'héroïsme avec la piété, qu'on peut être un grand prince et un grand saint, rendre ses sujets heureux et glorieux sur la terre et mériter soi-même la gloire et le bonheur de la patrie céleste. Mais, tant qu'il y aura des passions sur la terre, l'incrédulité subsistera et proposera toujours ses objections mille fois détruites et mille fois ranimées de leurs cendres. Depuis le renouvellement de la philosophie, le jour plus par qui a éclairé les sciences a rendu l'impiété plus subtile et plus séduisante; elle semble s'être forgé de nouvelles armes ou du moins avoir déguisé ses anciens traits. Il est dans le monde, dans le sein même de la Religion, dans ce royaume très chrétien; le dirai-je, Messieurs? Dans cette ville, une secte d'incrédules d'autant plus dangereuse qu'elle ne suit souvent rien ou presque rien. Ils n'ont cultivé leur raison que pour mieux renoncer à ses principes; ils pré-

1. Je voudrais un autre mot.

2. Le *plus* est trop loin du *que*.

3. Je n'aime point ce mot.

4. Après une phrase périodique, celle-là coupe trop sec.

tendent se dépouiller de tout préjugé, afin de fouler aux pieds des vérités généralement reçues; ils vantent sans cesse l'excellence de la nature humaine qu'ils déshonorent le plus souvent par leurs vices, et ils soutiennent que le seul nom d'une révélation surnaturelle doit la rendre incroyable sur la foi de leurs principes; ils aiment mieux croire des choses incompréhensibles, s'ils croient quelque chose, et admettre même des absurdités que de se soumettre à nos mystères. Ils rendent la Religion complice et responsable des fautes qui se sont glissées sous la plume de ses défenseurs et dans la conduite de ses sectateurs; comme si les saints même devaient être impeccables et cessaient d'être des hommes, ils étudient la Religion avec soin; ils en recherchent curieusement toutes les sources dans la vue d'en découvrir les prétendus défauts, et de l'exposer sous des couleurs aussi fausses que noires. Ils voudraient que ses excès justifiasent ceux de leurs passions; cependant, ils affectent de paraître honnêtes gens et bons citoyens, afin d'être avec plus de sécurité mauvais chrétiens. Eh! Ne veulent-ils pas même que la Religion soit immolée à ce fantôme de probité? Religion sainte! Ils vous représentent comme la perte des empires, l'ennemie des cités, la désolation des familles, le malheur des hommes. On vous accuse d'éteindre les plus claires lumières de nos esprits, d'étouffer les sentiments purs que la nature a gravés dans nos cœurs, de substituer une perfection chimérique et nuisible aux vertus sociales que la raison prêche à tous les hommes. On vous impute d'éloigner les particuliers des emplois civils, de tarir l'émulation qui invente et qui perfectionne les arts, de proscrire l'amour des richesses qui produit et soutient le commerce, d'énervier le courage ou de le transformer dans une fureur fanatique, de n'autoriser enfin que des guerres honteuses et funestes, ou de nourrir une paix malheureuse; si l'on avait pu, dit-on, sans s'aveugler soi-même, suivre à la lettre les règles de l'Évangile, bientôt les chrétiens seraient devenus les esclaves des autres nations; bientôt les corps politiques se privant eux-mêmes de la vie et du mouvement seraient tombés dans une langueur mortelle et auraient péri sous leurs propres ruines. Recherchant ensuite l'histoire des siècles passés, on veut attribuer à la Religion tous les malheurs qui depuis sa naissance ont affligé le monde, la décadence de l'Empire romain, l'inondation des barbares, l'usurpation des états, les séditions, les guerres civiles, la dépopulation du nouveau monde, les révolutions journalières de l'Angleterre; que sais-je? Voilà des événements postérieurs à l'établissement du Christianisme; il en est donc coupable. Religion divine dans vos préceptes comme dans votre auteur! On vous a pris souvent pour prétexte des passions: vous ne les avez jamais allumées. On a souvent abusé de votre nom; plût à Dieu qu'on eut toujours suivi vos principes! L'ingratitude sous les coups de laquelle vous êtes née ne cessera-t-elle jamais de vous persécuter? Quoi, peut-on se refuser au spectacle que présente la face de l'univers renouvelée par la prédication de l'Évangile? C'est l'objet,

Messieurs, que je veux aujourd'hui présenter à vos regards. Combien la Religion a été utile au monde, c'est là ce que je compte exposer dans ce Discours. J'envisage d'abord les hommes en eux-mêmes et sans autres liaisons que celles que la nature a mises nécessairement entre eux, pour vous faire voir combien elle a été perfectionnée. Je considérerai ensuite les hommes comme formant un corps politique; une république unie par la sagesse des lois et par la force du gouvernement, pour vous montrer les avantages dont la Religion a été une source féconde pour les états. En un mot, l'accord admirable de la Religion avec la nature et avec la politique fait tout le partage de ce Discours.

---

(feuille détachée)

la simplicité des apôtres si opposée à l'enthousiasme, leur désintéressement si opposé à la fourberie ... les idées de ces hommes du peuple, de ces hommes ignorants dans une nation barbare; leurs idées sur la divinité si saines, si raisonnables, si l'on les compare avec les idées de ceux que les peuples les plus polis avaient nommés sages; leurs idées sur la bonté de Dieu envers les hommes si grandes, si nobles, si étendues comparées avec celles des docteurs juifs qui la restreignaient à leur nation ... ce sont donc des fous, des enthousiastes qui ont réformé les idées du genre humain sur la divinité et ce qu'il y a de bien extraordinaire, pour des enthousiastes qui les ont rendues plus simples ... c'est à des fourbes, à des scélérats que le monde doit les notions les plus pures de la morale et de la vertu, et quelle morale? quelle vertu? d'une vertu dégagée de toutes les chimères inventées par le ridicule orgueil des Stoïciens, d'une vertu éclairée sur la vanité des observances Pharisaïques, d'une vertu qui réside dans le cœur, d'une vertu aisée à pratiquer; qui consiste dans l'observation de tous les devoirs, d'une vertu simple et sans faste d'une vertu douce et sans amertume, sans dureté, d'une vertu qui se fond toute entière dans la charité ... c'est donc en trompant les hommes qu'au bout de quatre mille ans, on leur a appris à s'aimer les uns les autres, à se regarder comme frères, comme les enfants d'un même père tout à la fois et d'un même Dieu qui les aime tous également, à lui rendre un hommage du fond du cœur, à payer son amour par l'amour ... on les a trompés, sans intérêt pour les tromper ... bien loin d'avoir aucune vue d'ambition, les auteurs de cette fourberie se refusent aux honneurs qu'on veut leur rendre; ils renoncent à tout, persécutés par toutes les puissances; ils enseignent à leurs disciples à leur être soumis, à les respecter, à souffrir plutôt la mort que de rompre les liens de la subordination politique ... ces hommes trompeurs prêchent partout la sincérité et la simplicité.

---

**Vues pour le Discours**

1 Les hommes sont dispersés après le déluge, deviennent tous barbares, occupent une espace immense, sont séparés par la diversité des langues et s'ignorent les uns les autres.

2 Les révolutions et les guerres amènent les mêmes mouvements et les mêmes migrations que, dans les temps postérieurs, les nations et les langues se mêlent, les montagnes, fleuves, mers, s'opposent au mélange; il se forment des langues générales.

3 Le labourage rend la demeure des hommes plus fixée. Ils se multiplie et le loisir perfectionne tout.

4 Les conquêtes commencent à former des empires, et la quantité des ravages de la guerre est diminuée et la paix règne au moins dans le centre des grands états; un plus grand nombre de génies rassemblés hâte les progrès.

5 Ainsi, dans toutes ces révolutions, le bien reste et le mal disparaît.

6 Tout ce qui secoue les hommes et les fait changer est bon, parce qu'une pente naturelle les porte au bon et au vrai.

7 Les mœurs des hommes s'adoucissent avec le temps, et on doit remarquer que les passions féroces diminuent, à mesure que l'esprit humain s'éclaire indépendamment du frein des lois. Elles se développent moins; elles sont nécessaires à chaque homme, dans les premiers temps, pour le défendre contre celles des autres; mais, en disparaissant de dessus la terre, elles ne sont plus que nuisibles aux individus. En un mot, contrebalançant tous les individus et les défendant les uns contre les autres, elles doivent diminuer dans tous uniformément.

8 Les pays où les grands empires ont été formés, et par conséquent, les pays ouverts et fertiles comme plaines de la Babylonie, plutôt ont été le théâtre du despotisme, parce que dans l'enfance de la raison, le despotisme est le plus facile. Dans les petits états, la puissance du peuple l'empêche de s'établir; dans les grands, il faut que le peuple soit réuni par des puissances intermédiaires.

9 L'esprit de commerce et de liberté est l'esprit des villes; mais, cet esprit ne se développe que dans les petites villes. Dans les grands empires, il peut être enchaîné par l'esprit général, comme en Orient par le despotisme, en Europe par le gouvernement des fiefs.

10 Les mœurs sont formées de l'ancien esprit des Germains, de celui des fiefs et de celui des anciens habitants de la Gaule, de la nature et des villes; celui-ci n'a cessé de prendre le dessus, à mesure que l'ancien gouvernement s'est aboli par l'augmentation de l'autorité des rois, l'établissement des communes, de la magistrature, du commerce et des troupes réglées.

11 Le pire des gouvernements, c'est celui où une multitude gouverne une multitude, parce que l'esprit des corps est d'ériger toujours leurs passions en vertu; l'amour propre se déguise à lui-même sous le prétexte du bien public d'un corps dont on fait partie.

12 L'équilibre entre les villes de la Grèce y produisit la politique.

13 Les barbares conquèrent Rome; mais, c'est à cette conquête que le Nord de l'Europe doit sa politesse. Soit que les barbares conquèrent ou soient conquis, les limites de la barbarie se reculent toujours. Si les Arabes n'avaient été que conquérants, ils auraient adopté les mœurs chrétiennes.

14 Les guerres et l'ambition des princes, les colonies, les voyages, les livres, le commerce dévoilent peu à peu les nations aux nations. La politique étend ses vues, à mesure que de nouveaux intérêts lient les nations. Dans la Grèce, elle ne balançait que des villes et n'envisageait qu'un petit espace. Aujourd'hui, elle balance des royaumes et embrasse l'univers.

15 Les mœurs et les lumières se communiquent par le commerce des nations, par l'empire naturel de la raison qui n'a souvent besoin que d'être montré aux hommes.

16 L'esclavage et la pluralité des femmes qui en est la suite, introduisirent le despotisme dans des mœurs civiles, concentrèrent les familles en elles-mêmes, anéantirent la société et perpétuèrent l'ignorance en Orient.

17 La tyrannie des Nérons produit moins de maux que celle de l'Orient. Un empire formé de la réunion de plusieurs états dont les mœurs et les lois sont formées, n'est jamais absolument despotique. La même raison de facilité qui engage les premiers conquérants à étendre le despotisme par le moyen de leurs gouverneurs fait souvent que les nouveaux laissent aux états particuliers leurs lois et leur gouvernement municipal. Le despotisme ne flatte les rois qu'autour d'eux dans la sphère étroite que peuvent embrasser leurs passions et leurs caprices, et ils ne sont pas plus hommes que d'autres.

18 Les anciens Germains étaient libres; ils étaient tous soldats et les soldats ne s'asservissent que par la discipline; de là, la nation répandue dans les Gaules garda sa liberté et les conquêtes quoique faites par des barbares n'amènèrent point le despotisme.

19 Le génie est répandu sur la masse des hommes uniformément. Les événements le développent, et au milieu de leurs variétés, il agit toujours. Cette variété infinie de coutumes de gouvernements. La multiplication des hommes le multiplie. Tous trouvent d'abord les mêmes ressources. Les sciences sortent de leur première grossièreté, demandent des hommes tout entiers, et ne sont cultivées que par le petit nombre de génies que l'éducation met à portée de se développer.

20 Un génie, par ses progrès, met les sciences à la portée d'un plus grand nombre de génies. L'inégalité des nations augmente; il y a pour elles

une éducation générale et il ne sera point égal de naître dans l'une ou dans l'autre, plus tôt ou plus tard. Le génie s'augmente, parce que les hommes se multiplient, et plus de génies se développent, parce que les lumières s'accroissent.

21 L'inégalité des progrès vient de la lenteur des premiers arts et, par là, souvent de la fertilité plus ou moins grande de la terre; mais, même à égales circonstances, un génie que le hasard a développé, ici plutôt que là, a hâté des progrès qui en ont amené d'autres. La marche de l'esprit humain s'accélère et l'inégalité paraît plus grande. Elle diminue par le commerce des nations; mais, comme elles ne sont point encore rapprochées toutes, en observant tout le présent, on voit toutes les nuances de barbarie répandues sur la terre et en quelque sorte des monuments de tous les âges.

22 Les premiers progrès sont dans la nature même de l'homme. Les sciences les plus sublimes tiennent aux sens; de là, cette grammaire générale qui règle toutes les langues; la poésie, la musique et la danse sont liées l'une par l'autre et ne furent d'abord que l'expression d'une joie commune. Tous les phénomènes de la nature frappent les sens, invitent à chercher leurs causes. Les premières observations se firent avec les yeux; la curiosité toujours piquée de plus en plus les a multipliées.

23 Les progrès des langues sont toujours réels, quoique lents; le génie ne manque point avec le temps.

24 Les premières histoires furent des chansons. Mais, sans chronologie et comme l'imagination des hommes a une portée déterminée comme leur vue, elles ne remontent pas haut. Après l'invention de l'écriture, l'imagination et l'orgueil suppléèrent au vide de l'histoire.

25 Les gouvernements sont quelquefois l'ouvrage de la faiblesse de plusieurs peuples qui s'unissent pour la défense commune et cette union volontaire est toujours libre. C'est là la différence de la servitude des Tartares et de la liberté des Francs.

26 Nos idées ne nous viennent que par masses et relativement à nos besoins comme signes de l'existence des objets. Comme signes, elles sont abstraites, mais n'expriment point une essence abstraite.

27 La différence des sciences mathématiques et des autres vient de ce que celles-là n'étant que des combinaisons d'idées simples, il suffit d'observer la manière dont on les combine; on compare les conséquences avec le principe; mais dans les autres sciences, il faut tout comparer avec les choses même existantes hors de nous.

28 L'homme qui commence à réfléchir sur lui-même se trouve dans un labyrinthe où il est entré les yeux bandés. Il est assailli de toutes ses idées, s'il s'agit d'analyser et de connaître la logique et le peu qu'il peut savoir de la nature des êtres, et s'il s'agit de la physique ou de ramener les

effets à leurs causes, ce n'est que par voie d'hypothèses qu'il faut vérifier.

29 La physique faite de métaphysique analysée et d'observations ne fut longtemps que la métaphysique. Ce n'est que quand les hypothèses furent formées d'après l'action mécanique des corps que les mathématiques purent les développer et que la perfection des arts qui se perfectionnent même dans la décadence du goût et les hasards accumulés fournirent de nouveaux instruments, multiplièrent les observations et donnèrent plus de facilité de les combiner. Le progrès de la physique a perfectionné les mathématiques; le besoin a perfectionné l'instrument.

30 Le principe de la vérité des idées n'apprend rien et s'établit aisément; on croit bien des choses, on se demande pourquoi et, comme souvent on croit sans connaître les raisons, comme elles ont souvent leurs sources dans une infinité de perceptions qui nous ont affecté à notre insu ou dans notre enfance, souvent dans la vérification que fait l'expérience d'une chose qu'on nous a apprise, on se dit à soi-même; c'est parce que j'en ai idée et toute idée est certaine, car d'où viendrait la certitude, un des plus féconds principes de nos erreurs; c'est de chercher de fausses raisons des vérités, parce qu'on a oublié les vrais. Ici le labyrinthe a lieu. Ce principe est séducteur; chacun le croit favorable.

31 Les méthodes se multiplient avec les découvertes. Voyez les; l'échafaud s'élève avec le bâtiment, et par les nouvelles propositions générales, les éléments des mathématiques pour embrasser plus de choses dans le même espace se refondent de siècle en siècle, et (*sic*)

32 Les mathématiques sont fondées sur les sens. Ce sont eux qui ont présenté les premières figures, et comme tout, dans elles, est réciproque, il a suffi de connaître une propriété pour découvrir les autres.

33 La morale traitée scientifiquement est sujette aux erreurs. Elle suppose; elle est comme la métaphysique embrouillée par le chaos du langage, et pour être complète, elle demande la connaissance de tous les rapports qui lient les hommes; mais, l'instinct et la société ramènent au vrai.

34 La certitude de l'histoire s'augmente par la multiplicité des livres et par l'impression.

35 Deux mille ans après avoir imprimé sur des médailles, on s'est avisé d'imprimer sur du papier. Tant les progrès en tout genre sont lents, tant on s'avise difficilement de la chose la plus simple.

36 La boussole ouvrit l'univers. Tant de petits progrès s'accumulaient et produisirent tout à coup leur effet.

37 Les opinions ont conduit aux opinions. Elles ont souvent dépendu du degré de perfection où les sciences étaient portées.

38 Origine de l'idolâtrie. 2 principes. Eternité de la matière.

39 L'imprimerie, la voix des premières découvertes appela le

génie du fond de son obscurité, communiqua tout et perfectionna tout. Les découvertes d'un seul homme appartiennent à l'instant à l'univers.

40 Jusqu'aux conquêtes d'Alexandre, on n'avait guères connu ce que l'on appelle érudition; on n'avait guères étudié jusque-là que les choses. On commença à étudier les livres; la vanité du savant qui cite non pour éclaircir, mais pour montrer qu'il a lu, gâta le goût.

41 L'imperfection de notre goût avant le siècle de Louis 14 est totalement différente de la grossièreté antique. Nous étions savants et nous avons une foule d'idées et de connaissances acquises. Les anciens n'avaient besoin que de progrès et d'instinct. Il nous fallait de réflexions.

42 Le luxe soutient le goût quand il est modéré, le perd quand la vanité seule est écoutée.

43 Le progrès de la mécanique des arts peut nuire au goût, qui, n'étant qu'un sentiment fin des rapports des objets avec nos sens, se perd, quand on cherche dans les ouvrages autre chose que ce rapport, comme l'habileté de l'ouvrier, le signe de l'opulence, etc.

44 La mode a aussi son empire sur le goût et l'entraînement des esprits par un génie supérieur.

45 La peinture et la sculpture dépendent du grand débit et de la protection éclairée des princes, parce que ce sont des arts très difficiles. La Grèce, l'Italie, le Bas-Empire, la pauvreté à Constantinople, l'avilissement des arts en Europe par l'esprit de la noblesse.

46 La partie du goût ne se perfectionne point dans les arts d'agrément; je m'explique; les sens ont une portée déterminée; l'analogie des langues se fixe par là. Les génies qui réussissent dans la peinture et la poésie acquièrent une espèce d'immortalité différente de celle des philosophes. Cependant, cela n'empêche pas qu'il ne se fasse un progrès même dans ces choses. L'optique s'est perfectionnée; la connaissance théorique du cœur humain, quoique la peinture des grandes passions soit partout la même, et l'art poétique se perfectionnent.

47 Le génie oriental n'est empêché que parce que les langues ont été fixées trop tôt en Orient.

48 Les Chinois ont été fixés trop tôt et c'est la cause de leurs bornes.

49 Plus une langue est riche, plus les hommes sont perfectionnés et plus il est aisé de s'égarer l'imagination à moins d'empire et ne dirige point seule le génie dans le choix des images.

50 Les langues se perdent par le mélange et sont longtemps à reprendre la transparence nécessaire pour la clarté et la poésie, ainsi les langues de l'Europe formées d'une langue du Latin.

51 Il y a de l'éloquence partout où il y a des passions et des

intérêts; mais, l'éloquence d'apparat se perfectionne dans les républiques et se perd dans les monarchies où les délibérations sont plus secrètes. Les Romains allaient étudier en Grèce et en rapportaient une éloquence que leurs maîtres n'avaient pas. C'est la difficulté d'imiter cette marche de la nature impétueuse, de copier ces détours.

52 C'est l'analogie des langues qui, en les enrichissant, y met des terminaisons qui en font l'harmonie et la clarté, et c'est cette analogie qui cesse d'être uniforme par leur mélange.

53 L'imitation est un avantage sur les anciens qui rend les modernes plus soutenus.

54 L'histoire qui s'augmente et la philosophie fournissent de nouveaux aliments au génie.

55 Le choix des images est une partie du goût qui dépend des mœurs et qui s'épure par la société.

56 Les images agréables sont celles qui font partie de la nature vivante. Tout le reste est froid et n'est que de l'esprit.

57 Une langue une fois fixée par les grands écrivains change peu, s'il y a une décadence. Elle vient d'autres causes comme dans l'Empire romain.

58 Les arts se conservent dans la chute du goût et par là se perfectionnent. Le fonds même des idées s'augmente par les combinaisons multipliées des faits.

59 Bacon, Galilée, Descartes, Newton, Leibnitz.

60 Il est aisé de savoir tout, quand les hommes savent peu; tout n'est que ce qu'ils savent. Dans la suite, les progrès font séparer les sciences; la raison apprend à les réunir du moins par les principes.

61 L'élévation des villes hanséatiques, des communes fut le plus grand changement dans les mœurs et hâta les progrès.

62 Les Arabes furent moins barbares que les Turcs. Ils n'apprirent cependant bien que les mathématiques, parce que ce sont les seules sciences qui ne demandent que du génie; la superstition et le mauvais goût n'y font rien.

63 Les disputes de Luther ont favorisé l'érudition.

64 L'Italie se trouva à peu près dans la situation de l'ancienne Grèce, lors de la renaissance des lettres.

65 Caractère des anciens Athéniens.

66 Caractère de quelques autres peuples.

67 Le hasard qui amène un tel génie dans tel temps, qui présente tel fait à celui qui est capable d'en tirer des conséquences. Les hasards des gouvernements sont les causes de l'inégalité des progrès.

68 La Chine ne s'est perfectionnée que quand elle a été divisée en petits royaumes.

69 Les guerres civiles de France retardèrent la fixation de la langue et lui laissèrent plus de temps pour se polir.

70 Les Français ne sont peut-être si amis de la méthode que parce que leurs écrivains n'ont écrit que lorsque l'esprit philosophique s'est répandu.

71 Les scolastiques instruits par la Religion portèrent plus loin la métaphysique. Mais, éloignés par le goût de la dialectique et le mépris des arts mécaniques, ils traitèrent mal la physique.

72 Une observation a souvent suffi pour fonder un système. Les faits s'amassent et se rapprochent en se multipliant.

73 Il vient un génie après lui; on aplanit les réalités qu'il a ouvertes et il se passe du temps, avant qu'un second s'élève de ce niveau où le premier a porté les connaissances humaines.

74 Les talents sont rares. Il n'y a pas beaucoup de grands hommes à la fois. On crie qu'après Virgile et Horace, tout était tombé en décadence. Il y a peut-être du vrai. Mais, ce qu'il y a de plus vrai, c'est que Virgile et Horace étaient morts. Je voudrais qu'on ne prît pas la différence du génie de quelques auteurs pour une décadence de langage, et quoiqu'il y ait du vrai, cependant, la plupart des jugements qu'on porte ainsi sur les siècles et sur la prétendue décadence, sont portés sans examen.

75 Après les conquêtes d'Alexandre, le mélange de la philosophie grecque avec les superstitions orientales produisit le Pythagorisme moderne.

Je vois naître les événements et s'assembler pour produire la renaissance des lettres, les langues, les nations, les Turcs, la puissance des princes, l'expulsion des Maures, les républiques d'Italie, les Portugais et les Espagnols, Indes et Amérique.

Je vois……

[これらのチュルゴの未発表資料の調査から発表にいたるまで格別の御配慮をいただいた Monsieur le marquis et Madame la marquise Naurois-Turgot の御好意に心からお礼を申しあげる。

本稿は昭和47年度および昭和48年度科学研究費による研究成果の一部である。]